

## 微分の叙情，個体の神性

市 田 良 彦\*

思い出話からはじめることをお許しください。私の小泉さんとの出会いは、本書<sup>1)</sup>に収録されている論文、「ドゥルーズにおける普遍数学」でありました。初出一覧を見ると1997年の刊行です。なぜわざわざ初出一覧を見たかという、私のなかでひとつ記憶が曖昧な点があったためです。あの鮮烈な論文を読んだとき、私はどこにいたのだろうか。パリだったか大阪だったか。私はたしか95年に帰国していますから、初出一覧の情報によるかぎり私は大阪でその論文を読んでいるはずですが、なぜかパリで読んだような気もするのです。論文を読んで衝撃を受け、当時『批評空間』という雑誌の編集実務を担当していた内藤さんという人に電話をしたことをはっきり覚えています。しかしそれもなぜかパリからわざわざ電話したような気さえするのです。小泉義之って人、知ってる？『現代思想』にすごいドゥルーズ論を書いている。ぜったい『批評空間』にひっぱりだすべきだよ。なんだったら対談でもさせてもらいたいぐらい。そんな話をしました。

パリで読んだのか大阪で読んだのかははっきりしないにもかかわらず、どうしてはっきりしないかは今でははっきりわかります。帰国する直前に、私はユルムの高等師範学校で行われたコロキウムに参加し、「ルイ・アルチュセールにおける時間と概念」という発表をしました<sup>2)</sup>。もちろんその時点でアルチュセールをどう読んでいたかという話でしたが、「時間と概念」という問題の立て方、そこで用いた理論枠組みはドゥルーズのものです。うまく利用できたかどうか怪しかったので、そのつもりであったと言うべきでしょうが、私としては『意味の論理学』におけるストア派論と『哲学とはなにか』における概念論を、なんとかアルチュセールの「理論」概念——理論という概念です——に接合ないし導入したかった。しかしどうも稚拙なやり方でしか果たせなかったという思いが強く、発表のあとしばらく私はどっぷりドゥルーズに浸かっていました。問題関心そのものをドゥルーズの圏内に自覚的に置いてみました。そ

---

\*いちだ よしひこ 神戸大学教授

の流れで小泉さんの論文に出会い、自分よりはるかに先を行っている人がいる、と驚嘆したわけです。パリ時代の終わり頃から続く私の主観的時間のなかに、突然、論文「ドゥルーズにおける普遍数学」が出現した。だから記憶が曖昧なわけです。それを読んだころ、私は頭を半分パリに置いてきたままだった。論文は、このままではいけないと私に思わせてくれたような気がします。論文に違和感があったのではありません。逆です。ほんやりとしているがゆえに追いかけてきたドゥルーズ的ななかに、はっきりした像が与えられた気がしたのです。論文を理解するために、私は数学まで一定勉強し直しました。そしてそうすればするほど、もうこの論文でいいではないか、これで十分ではないか、と強く思うようになったのです。私なりの別のほうを探るべし。それが私にとっての「小泉の教え」——『アルチュセールの教え』<sup>3)</sup>ならぬ——でした。

「教え」の中身については、「別のほう」を探っているうちにほとんど忘れていました。ドゥルーズのなにに心惹かれ、小泉論文のどこにその答えを見つけたのか。しかし「別のほう」の入り口にあった、というか入り口に当時の私が掲げた看板の名前ははっきりしています。「政治」です。単純化ないしほとんど矮小化して言ってしまうと、このドゥルーズで「政治」をやれるのか、と私は思った。政治について「語れるのか」、ではありません。あくまで「やれるのか」です。もうとうに政治実践に埋没する気など失っていましたが、この区別は重要でした。スピノザ的に言えば、「秩序と連関」において並行する「観念ともの」の「もの」のほう、心身並行論における「身体」のほうに私の問いはかかわり、それはマルクス主義者にとっては「理論」と「実践」という対における「実践」の問題です。唯一の実体をめぐる決定問題や、マルクス主義における党の問題にかかずらい、足を掬われる思いをしたことのない人には存在すらしていない問題です。

今回、件の小泉論文を改めて読んでみて一定整理ができました。論文を読む前の私にとってのドゥルーズ、そして読んだ後のドゥルーズはなおいっそうみごとに、問題を解いているように見えた。一言にまとめれば「微分」がその答えです。唯一の実体と呼ぼうがほかのどんな名前前で呼ぼうが、世界は強い意味において「微分方程式」として今・ここにあり、それを自ら解いている。あらゆる個体——私も国家も——はその「解くプロセス」における過渡的な「解」であり、私は「主体的」に——つまり「解」たる個体の側から——その「解くプロセス」に参加している。そんなイメージでしょうか。小泉論文を読む前から同様のイメージをもってはいたのですが、同時にそれではなにか足りない気がしていました。あるいはそんな美しい世界像に自足した人としてドゥルーズを掴まえてよいのかという疑念をもっていました。その私の主観のなかに「ドゥルーズの普遍数学」が飛び込んできた。しかし論文を読み返した現在でも、私にはどうもうまく言えないと思う点があります。この世界像のこと、あるいは「微分」という答えについてはありません。小泉論文が私に教えたのは、言ってみれば、答

えは「微分」だけではなかったんだということです。ドゥルーズがどこかで書いていました。「決定か非決定かなど鈍重な問題にすぎない」。煎じ詰めればこれが私に引っかかっていた命題です。ドゥルーズはとにかく「微分方程式を解く」という問題と、「決定・非決定問題」を切り離そうとしている。姿勢としてはあくまで切り離している。どのようにしてか。それがもはやもやしていた、あるいはいまだにしているわけです。

方程式を解けばよいのであれば、政治問題など存在しません。世界に向き合う私たちの問題はいかに壮大であれ、天気予報のようなものです。一定あたるし一定はずれる。それだけのこと。しかし傘をもって出るか否かはまったく別問題でしょう。小泉論文はこの別問題に明快な名前を与えているように思えます（あくまで読み返してみても、です）。「個体化」です。個体の側に決定権が移されているというわけではありません。決めるのは私でありあなただよ、というふうにして。ここで言う「個体化」とは、図式化してしまえば、傘をもって出るか否か決めようとするなかで「個体」なるものができる、という事態です。決定の前に「個体」は存在していない。決めるのは、スピノザ的に言えば、実体から決定されている局所的「様態」です。だから実体が決めている——微分方程式を与えることにより——と言ってもいい。けれどもこの「様態」はまだ「個体」ではありません。「個体」は実際に傘をもって出る／出ないを決めた瞬間に出現します。どっちでもいいけれども、どちらかでしかない答えを出して外に出た瞬間に、決定の「主体」が「個体」として立ち現れる。実体による完全な決定と、「個体」としての「主体」の自由は完全に共存しているのです。ニーチェ風に言えば、決定と非決定は遠近法の違いにすぎません。

小泉さんは件の論文において、世界像としての「微分方程式」から局所としての「微分」に視線を移し、その「微分」を「個体化」と同定します。そう名指した。けれども論文の核心はまだそこにはないと思います。小泉さんはこの「個体化」をさらに「生」と捉えた。論文の最後はこう結ばれています。「そんな風に私たちは生きて死ぬ」(p.90)。「そんな風に」とは「個体化しつつ」ということでしょうか。もう一文引用します——「海のざわめきや風の流れを思うように、そのように私たち個体は生体から死体へと変化していく」(p.89)。この叙情こそ私には、論文を読んだ当時も今も、論文の核心です。「～を思うように」すなわち天気予報を「見ながら」、私たちは生きているし、死んでいく。個体とはそういうものだ。たしかにそのとおりでしょう。だからドゥルーズについてはもうこの論文でいいではないか、と私も思ったのでしょう。そして、だから「このドゥルーズで政治がやれるのか」です。

ここにおられる方々には今更ご紹介するまでもないでしょうが、小泉さんはその後実際、「生の哲学」に邁進されます。どんな風に私たちが生きているのか、死んでいくのかを記述することを一つの哲学に昇華する仕事を続けてこられました。それは当然、歴史を振り返り、生をめぐる「思想」や「哲学」を問い直す思想史でもありましたし、現在どう生きて死んでいく

ことが可能か、あるいは生きて死んでいくべきかを問う倫理学でもあったでしょう。それを論じるのは今日の私の関心事ではありません。なににより、小泉さんの仕事はまだ続いていくはずだからです。ただ、私の目に映った小泉ドゥルーズを乱暴に図式化してしまった以上、その私の視点、「このドゥルーズで政治がやれるのか」と問うてしまった際の「政治」の視点から見た「生の哲学」への診断は、これも同様の乱暴さをもって提示しておくべきかと思います。どう生きて死んでいくか？——「さあ」。「ほっとけよ」。小泉さんも自分も戯画化して言ってしまいましたが、以下の論述をできるだけ簡潔に進めるための操作としてご寛恕ください。

「生の哲学」は小泉ドゥルーズの終点ではありえない。小泉さんも論文「ドゥルーズの靈性」で書いておられます。「ドゥルーズは、いわゆる生命主義的ホーリズムを生涯捨てなかったと私は考えている」(p.37)。「ホーリズム」ないしその変奏でよしとするなら、言い換えると一種の形而上学を希求するなら、私の思う小泉版「生の哲学」はありえなかったろう、と私は考えています。論文「ドゥルーズの靈性」を私はその証拠であるかのように読みました。「靈性」などという宗教的匂いの強い語を用いてドゥルーズを語るからではありません。ドゥルーズの著作に現れる「spiritualité」という概念と「spirituel」という形容詞の用法を丹念にたどった小泉さんの論述はそれ自体としてきわめて説得的で、ドゥルーズを同じくらい真剣に読んでこなかった私にとやかく言える隙を与えません。私がこの論文において興味を惹かれたのは、やはり私が最初に衝撃を受けた「ドゥルーズの普遍数学」との関連においてでした。私には小泉さんが「生」を再び「微分」に戻して考えているように見えたのです。というか、「微分」から「個体化」へ、「個体化」から「生」へと焦点を絞る、ないし移動させたあとで、その「生」に「微分」としての内容をあらためて与えているように。「生」はいったい、なにとなにの「微分」なのでしょう。私なりの出発点であるスピノザに引き寄せて言うと、「観念」と「もの」です。「心」と「からだ」です。ドゥルーズと小泉論文に引き寄せて言えば、「微分」たる「生」とはイメージの「自体 l'en soi」としての「物質」です。あるいは「イメージ即物質」が「生」の正体。論文に引用されているドゥルーズの言葉では、「生」はこのとき「もはやわれわれの有機的個性には属さず、われわれの内での神的な持ち分であり、光としての神とわれわれだけが取り結ぶ靈的な関係である」(『シネマ1』から p.15 に引用)。小泉さんの言い方では「思考は光速で運動する靈性を獲得する」(p.15)。

こうした把握で、なにがどう変わるのでしょうか。「生命主義的ホーリズム」からなにがどう。ドゥルーズにとってはなににも変わらないはず。彼はこの「ホーリズム」を「生涯捨てなかった」のですから。けれども論文において、小泉さんはこの「ホーリズム」=内在哲学をほんの一步踏み出る姿勢を示しているように見えます。「超越性=靈性」(p.29)と記すことにより、です。このイコールの出典は明示されていませんから、小泉さんが等号を置いたでしょう。とはいえ、「内在性=超越性」ならば、内在哲学や「ホーリズム」にとってはありふ

れた解釈というか、スピノザについてすらそうした読み方をする研究を私も読んだことがあります。だから個体の「生」や全体としての「内在平面」に超越性や靈性を認めることはさほど特異な読み方ではないと思います。ところが小泉さんは「超越性=靈性」と等置しているのです。「微分」dxを形成する二つのもの——デカルト的に二実体と言おうが数学的意味における近傍要素と言うにとどめようが、さらにイメージと言おうが物質と言おうが——の一方に「超越的」という性格を与えている。「靈性」はあくまで関係であって項ではないにしても、「内在性=超越性」という等置により二面的な関係になった関係の一面、「超越性」のほうにだけ「靈性」を振り当てていますから、同じことです。とにかく「超越性=靈性」という等置は、個体化する主体にまさに「即」神的存在性格 entité を与えます。靈的である主体はすでに神である、そう「超越性=靈性」の等式は告げます。「われわれ」ないし「私」は神と「靈的關係」を結んでいるとみなすにとどまらず、「われわれ」や「私」が即「神」だと言っている。それが「われわれ」ないし「私」の「靈性」を「超越性」と等置することの意味あるいは効果だと思います。全体ならぬ個体が「神」だと言ってしまうこと。これは「ホーリズム」からは出てこない立場ではないでしょうか。そんなことを言えば全体たる神の怒りを買うのではないのでしょうか。

こうした見方をするよう私に誘うのが、私にとってのフーコーです。あるいはフーコーが教えてくれる「政治」的なものの見方です。小泉さんの語る「靈性」は私にとっては、主体の本性的な宗教性である以上に、あるいは本性的な宗教性であるどころか、神に対する反逆であるという意味で徹底的に世俗的なものです。人間主体が神の地位に並び立つから、神の地位を脅かすからです。私としてはフーコーを援用しつつ、こう言いたい。「靈性」は「神託による統治から人間による統治への移行」を印づける（『悪をなし真実を言う』）。イラン革命について分析するフーコーを分析する小泉さんの次の記述には、したがって強烈な違和感を覚えました。「フーコーは、この別の統治を支えている宗教性、あるいはむしろ靈性に注意を向けるのである」（p.374）。「別の統治」とは「国家による統治とは別の統治」と理解しておけばこと足ります。地域共同体や宗教共同体による自発的な「自己統治」です。この「別の統治」は宗教的あるいはむしろ靈的なのではないでしょうか。宗教的であるとして、靈的なのか。靈的であるとして、宗教的なのか。いずれにしても「あの世」に結びつき、「あの世」を經由して「この世」を変えようとする「統治」であるのか。「イスラームの統治」は確かにそうかもしれません。それは小泉さんの言うとおりの「他界と別の生を結合する方式」（p.375）であり、それを実現する「蜂起」は「他界に関わっている」（p.377）。「あの世」、「われわれ」の「死後の世界」を經由せずしてなんの革命か！小泉さんはイラン革命論のフーコーとともにそう高らかに宣言して論を閉じます。けれども私には、その通りであるからこそ「イスラームの統治」は、より一般化して言えば神権政治は、すでに神々との分裂をはらんだ政治だと思えるのです。なにより、宗教者

が神を代弁しうるからです。神に「この世」を変えてもらうのを待たずに「われわれ」でそれをやろうとするからです。私にはほんとうに宗教的で霊的な統治とは、神の意志の顕現をひたすら待つだけの政治に思えます。思いあがってなにかしようとするな、です。それだけが神権政治を僭主政治への墮落から救ってくれるでしょう。

では「政治的霊性」とはなんなのでしょう。フーコーはテキストでは軽く「政治に霊的な次元を開く試み」（「イラン人たちはなにを考えて〔夢みて〕いるのか」『思考集成7』から p.375 に引用）と定義しています。この定義における「政治」は非霊的なものでしょう。なにしろそこに「霊的な次元」が開かれるその「そこ」ですから、前もってすでに「霊的」であってはいけません。現在世俗的になっているか、本性的に世俗のかはともかく、ここでの政治は霊的でも宗教的でもなく世俗的です。自己と他者からなる「われわれ」の世界。神は「われわれ」世界の政治からとりあえず棚上げにされています。政治においては「われわれ」が「われわれ」の間であくまで水平的な関係を結んでいる。ではそこに「霊的な次元を開く」とは？この点にかんして、私はもう一つ別のテキストを参照したいと思います。実は「政治的霊性」というタームは一連のイラン革命論の一つ「イラン人たちはなにを夢みているのか」が初出かつ唯一の使用例ではありません。このタームにはもう一つ別の使用例があります（まだ他にあるかどうかは知りません。あったらぜひ教えてください）。78年5月に行われた歴史家たちとの討論会の記録（「1978年5月20日の会合」『思考集成8』）がそれで、討論の主題はフーコーの著書『監視と処罰』でした。フーコーがイランに赴くのは年譜によれば9月になってからですから、それ以前のテキストです。ただテキストは80年になってようやく刊行されていますので、ひょっとすると一連のイラン革命論を書いた後に問題の箇所をフーコーが加えた可能性はあります。とはいえ討論主題からしてイランやイスラームの「イ」の字も討論記録には出てきません。さて問題の箇所です。討論会の最後のほうで、フーコーは「私にはまだ答えられていない問い」として、次のような問いを立てる。「そこにおいて真と偽の *partage* がたえず産出されるようになった歴史とはなんなのか」（『思考集成8』 p.175）。この問いそのものをフーコーは4つに変奏しており、その4番目に「政治的霊性」が出てきます。そこを訳しておきます。「もっとも一般的な政治問題とは真理の問題ではないだろうか。真偽を分割 *partager* する仕方と、自己と他者を統治するやり方とをいかにして結びつけるか。その両方を一新しようとする意志、一方によって他方を刷新しようとする意志（真偽の別の分割を統治の別のやり方により発見すること、別の分割から出発して別様に統治すること）、それが〈政治的霊性〉である」（同）。「政治的霊性」にはカッコが付いています。とにかく、ここでの *spiritualité* を「霊性」と訳していいのでしょうか。ここでの *spiritualité* は宗教的であるかどうか以前に真偽の *partage* と結びつけられています。真偽の *partage* は様々なテキストで「真理レジーム」—— なにをもって真となし偽となすかの体制—— とも言い換えられています。そしてこの *partage* と統治の結びつきが

「spiritualité politique」と言い換えられ、それが「もっとも一般的な政治問題」という位置づけを与えられる。とりあえず esprit を「精神」と訳して言えば、「精神」が真理と統治を結びつけると言っています。真理と統治、両方の改変を「精神」が橋渡しする。「精神」が介在することにより、真理と統治は両方同時にしか変わらない。ここでの発言は、もう少し後のフーコーが、私はこれから主体、真理、権力の関係を考えたいと述べたことのこの時点での表現だと思います。つまり spiritualité は意味的にはほとんど「主体性 subjectivité」—— 主体のあり方—— でしょう。霊的／宗教的であるかどうかは主体のあり方の一つにすぎないと思います。

私は昨日のシンポジウムにおける私の発表<sup>4)</sup>を、とにかくこの「もっとも一般的な政治問題」を自分なりに読み解くつもりで行いました。昨日来られなかった方のためにかんたんに要約してご紹介しておきますと、真理の問題としての政治問題とはつまるところ神々との権力闘争からはじまる歴史物語です。その意味では政治は最初から霊的な問題と言ってもよく、私は昨日「政治的霊性」の話をしたのだと言ってもよいのですが、権力闘争の相手としての神は「われわれ」以前に存在しますから、そこでの霊的問題は「われわれ」の「超越性」—— 神への生成—— とは異なります。神はたんに「上」にいる他者、権力者です。「霊 esprit」などという人間的用語では名指されない（元々は人の「息 souffle」の意でした）。神が esprit だなどと語るのはアナロジーにすぎません。この歴史物語のなかに esprit が登場するのは、神＝権力者が独占的に保持していた真理が人間—— あらゆる人間つまり個人です—— のなかに場を移されてからのこと。昨日も引いたコレージュ・ド・フランス初年度講義の一文をもう一度引いておきます。「人は自分自身の精神 esprit のなかで行う自己自身との議論において真理に到達する」（『知への意志』講義 p.21）。プラトンの「自己の内部への視線の転回」ですね。とにかく人間はあるとき、真理を外から、上から託宣として受け取るのではなく、自己の内部に探るようになった。私はこの歴史的な出来事を、真理をめぐる神と人間の分裂のドラマとして読み解こうとしました。というか、フーコーの真理問題としての政治問題をそのように読みました。そこでの esprit とは、視線の向きを変えることで「自己」のなかに開かれる空間にほかなりません。「自己の自己への関係」の別名です。一種の自意識ですからそれ自体にはなんの超越性もありません。ただし真理が奥底に沈んでいるはずの自意識ですから、かなりパラノイア的な自己であるかもしれません。とにかく esprit は「霊」とはとうてい翻訳することのできない人間固有の内部空間としてはじまる。むしろ「精神」、むしろたんなる「自己」です。

けれども esprit には神的な一面もまたたしかにあります。esprit が神との権力闘争の痕跡であることを示す一面です。Esprit は神から奪った真理の保管場所ですが、真理をそのように人間化、世俗化することで、人間は以前神とのあいだでもっていた垂直的な力の差異、まさに権力の差異を「自己」のなかに導入してしまいます。真理を探ろうとする「自己」と esprit の奥に真理を秘蔵している「自己」はもはや水平的な関係にない。真を語る自己は偽を

語る／語りかねない自己を支配しなければなりません。ことが真にかかわるかぎりそうです。真は存在を正しく記述するだけでなく、「かくあれ」と命令するからです。神から権力を奪った代償として、「自己の自己への関係」は権力関係であることを強えられるわけです。ひたすら神の視線を恐れる存在として互いに平等であった人間が、自分自身と不平等になる。真偽の *partage* とは人間界に導入された、あるいは引きずり下ろされた神々との権力関係の痕跡であるのだと思います。ハイデッガーによれば「真理への意志」とは「力への意志」そのものです。そして人間界では、つまり「われわれ」のあいだでは、自らに禁欲を課して自己に対し勝利を収めた者、そのようにして内奥の真理に他者より近づいた者が、権利上平等な他者たちを統治する資格を有する。フーコーの言う「倫理的差異」が「自己」のなかと「他者たち」への関係のなか、その両方に連動して働くわけです。垂直軸の差異と水平軸の差異とが交差するこの統治をめぐる差異的実体を「微分」と呼ぶことに、私はさして抵抗を覚えません。けれどもそれを「靈性」や「政治的靈性」とみなすことには大きな抵抗を覚えます。繰り返しますが「靈性」という訳語がもつというか、小泉さんがそこに持たせた「超越性」の含意を、この統治の微分はまったく持たないからです。それは「超越性」をむしろ否定している——神を天上から引きずり下ろしている——でしょう。フーコーの「*spiritualité*」は権力関係の内在化を強いる要因、より正確に言えば強いる構造です。小泉さんの「政治的靈性」は *spiritualité politique* というより、端的に *divinité politique* ではないでしょうか。あるいはフーコーのプラトンが「自己」へと折り畳んだ力関係の襞を、フォイエルバッハ的に「神」へと「疎外」された形式、折り広げられた形式で把握しているように思えます。疎外された「人間の本質」が小泉版「政治的靈性」であるように。だからこそ「別の生」は「あの世」を経由しなければ実現されない、と小泉さんは診断されたのではないのでしょうか。

註

- 1) 以下、小泉義之『ドゥルーズの靈性』からの引用は本文中に頁数を示す。
- 2) 市田良彦「ルイ・アルチュセールにおける時間と概念」、『現代思想』、青土社、1998年12月号。
- 3) ジャック・ランシエール『アルチュセールの教え』、市田良彦他訳、航思社、2013年。
- 4) 人文研主催国際シンポジウム「批判と真理——パレーシアについて」（2020年1月25日）において。その日本語活字版は市田良彦「いかにしてソフィストはパレーシアストになったか」、小泉義之・立木康介編『フーコー研究』、岩波書店、2021年。